

①ランドマーク 火の見櫓 三鷹市登録文化財・建築物



旧三鷹市消防団第十分団の鉄製火の見櫓。高さ18.2m。最上部に四角形の屋根を載せた望楼を備える。屋根には「東西南北」を切り抜いた方位板がつく。櫓の外形は下方に広がる安定感のある形で、一般的に好まれた規模、典型的な形状である。

上部の見張り台には「昭和十年九月 新調」と彫られた半鐘がある。望楼に設置される半鐘としてはかなり大きく、高さ82.4cm、最長口径45.4cmを測る。

(車窓から)

①近藤勇ゆかりの地

勇は天保5(1834)年、龍源寺からほど近い宮川家に生まれる。16歳で天然理心流の剣士・近藤周助(周斎ともいう)の養子となる。文久3(1863)年に土方歳三らと京都に上り、慶応3(1867)年大政奉還までの4年間はよく知られている新選組の活躍した時期である。京都・鳥羽伏見の戦いで銃撃を受け江戸に帰る。その後、甲陽鎮撫隊を組織して、山梨県勝沼に官軍を迎え撃つが、大敗して千葉県流山で投降する。

●生家跡・井戸跡

旧宮川家の屋敷は人見街道と小金井に通じる辻にあり、面積は約7,000㎡、建物は母屋165㎡のほか蔵屋敷など数棟があった。昭和18(1933)年に生家は取り壊され、現在は敷地の東南隅一部が調布市によって整備され、勇の産湯に使われたという井戸跡も残されている。調布市指定史跡。



●道場・撥雲館(はつうんかん)

天然理心流は、北辰一刀流など全国的に興盛した流派と異なり、当時は特に関係の深かった多摩地域に所在する小道場群によって流儀は支えられていた。これらの道場は、名主・富農層によって維持されており、農民階級である彼らが道場を持ち、学ぶこと自体、当時の多摩地方の尚武の気風を示しているであろう。勇の死後、流派は養子の勇五郎に引き継

がれ、彼の開いた道場・撥雲館とその門下らによって現在に伝えられている。



◀近藤家敷地内の道場(奥)

▼ 門前設置の解説板内容より

近藤道場 撥雲館

豪農であり、かつ篤農家でもあった近藤勇の父宮川久次郎は、広い自分の屋敷内に寺子屋を開くとともに、幕末時盛んであった武術の一派「天然理心流」の道場をもって、勇兄弟をはじめ近在の子弟を集めて学問や武術を指導していた。

天然理心流は、近藤長裕を初代とする流派で、江戸に道場を持つかわら、多摩地方に広く出稽古していた。小技より気迫を重んじ、いかなる相手にも動じない極意必勝の実践を大事にする武道であった。三代目近藤周助は、月に二・三日招かれて久次郎の道場に通っていたが、勇の度胸と技量を見込み、近藤家の養子として迎え入れた。時に勇十六才、後二十八才で四代目を襲名。

勇が近藤家に入ってから、高弟や後になっては長兄の子でやはり理心流達人の宮川勇五郎等が主となって多摩一円の門人を指導、その数三千人ともいわれている。

勇五郎は父から分け与えられた屋敷内の納屋を、明治九年から道場としていた。この道場が「撥雲館」である。その名の由来は、ある時ここを訪れた山岡鉄舟が命名し看板に揮毫したと伝えられている。

「撥」という字は「とりのぞく」という意味をもっているが「撥雲」という館名は暗雲を取り除くという意味で、当時の世相からみてうなずけるものがある。撥雲館はその後手狭になったため、門下生の協力で昭和七年北側空地に改築し、盛大な道場開きが行われた。しかし、勇五郎は翌年八十三才で亡くなった(勇五郎は勇の養子となり、天然理心流五代目を襲名した)。その後、道場は門人たちの手で維持され、稽古は続けられた。

太平洋戦争が始まり、調布飛行場の建設に伴う勇五郎宅取壊しの際にも、門人たちの熱意によって、道場は勇五郎の娘の嫁ぎ先である東隣の岸家(現)の土地に移築された。さらに戦後になって、人見街道の拡張のため再移転する時、再び近藤家敷地内の現在地に移築され、今日に至っている。

平成二年三月二十六日

調布市教育委員会

②龍源寺

曹洞宗。正保元(1644)年、府中高安寺第四世の開創。開基は大沢村を開いた箕輪将監(みのわしょうげん)。近藤家、宮川家の菩提寺。本堂前にある左右対のイチョウの大木は、目通りで各々3.60m、3.38m。旧本堂の建立時に植えられたとすれば樹齢300年位と推定。

門前には、六地藏・庚申塔などと並んで近藤勇の胸像や辞世碑、天然理心流碑が出迎える。



▲龍源寺



▲近藤勇の胸像



龍源寺前の石碑群 ▶
辞世碑、天然理心流碑など

●近藤勇の墓 都旧跡

慶応 4(1868)年 4 月 25 日、板橋刑場で処刑された。遺骸は遺族や門弟によって、肩の銃撃痕を頼りに掘り出し、密かに運ばれて、この龍源寺に葬られてと言われている。

法名は貫天院殿純義誠忠大居士(かんてんいんでんじゅんぎせいちゅうだいこじ)。35 歳。現在の墓域は昭和 31(1956)年に改修されている。背高い右から 2 番目が勇の墓石。墓前に備えられたノートに綴られた文字から、彼の根強い人気を窺い知ることができる。



▲近藤家墓域



▲近藤勇の墓

●穴仏と供養塔

明治 17(1884)年、現在でいう雑誌『武蔵野叢誌』に「横穴」発見の記事がある。そこで発見された人骨は本寺で供養された。それが「白骨様」の名で評判となり参拝者が多数集



まり、縁日のような賑わい、騒動を引き起こしたという記事である。今でいう横穴墓群の発見の最初となろう。

◀近藤家墓域の真向かいにある。手前の大形の列石は「横穴墓」の閉塞石であろう。

③武蔵野の森公園

この都立武蔵野の森公園は、旧「調布飛行場」の一部利用によって近年整備公開された。

ところで、戦時下の三鷹市は飛行機工場の町。日本無線や正田飛行機製作所などの軍需工場や中島飛行機三鷹研究所(現在の国際基督教大学と富士重工の敷地)は有名である。

飛行場周辺には、掩体壕はじめ往時の足跡を残している。本日の見学コースから離れるが、飛行場の石門柱(一対)、崖上には大沢特別養護老人ホームの地に円形に囲まれた数基の高射砲(こうしゃほう)台座が残っている。米軍の艦載機の飛来に際し射撃や情報の発信基地を付設していた。このほか軍用・兵隊用の大形防空壕が幾つも残されている。(次頁参照)

●掩体壕(えんたいごう) リーフレット参照

昭和 19(1944)年、軍戦闘機を爆風などから防護するための格納庫が「調布飛行場」内に 60 基ほど造られた。有蓋(天井をもつタイプ)と無蓋(天井なし)の 2 種がある。1 つの壕に戦闘機 1 基を格納する。三式型、愛称・燕飛(ひえん)や五式戦闘機が主。下の 2 基が残っている。平成 20 年の発掘調査に際して、4 機分のプロペラが発見されている。



◀ 大沢 2 号掩体壕



大沢 1 号掩体壕

発見された飛燕のプロペラ

[寄り道すると]

飛橋（とびばし）と射塚（しゃだ）

野川に架かる小さな橋。戦時下、戦闘機を飛行場から川向こうの射塚に運搬するための橋があり、現在の橋名の由来らしい(現在の橋・左下)。

射塚は、崖を削りとった斜面を的に、戦闘機による射撃訓練や機器調整を行った所。



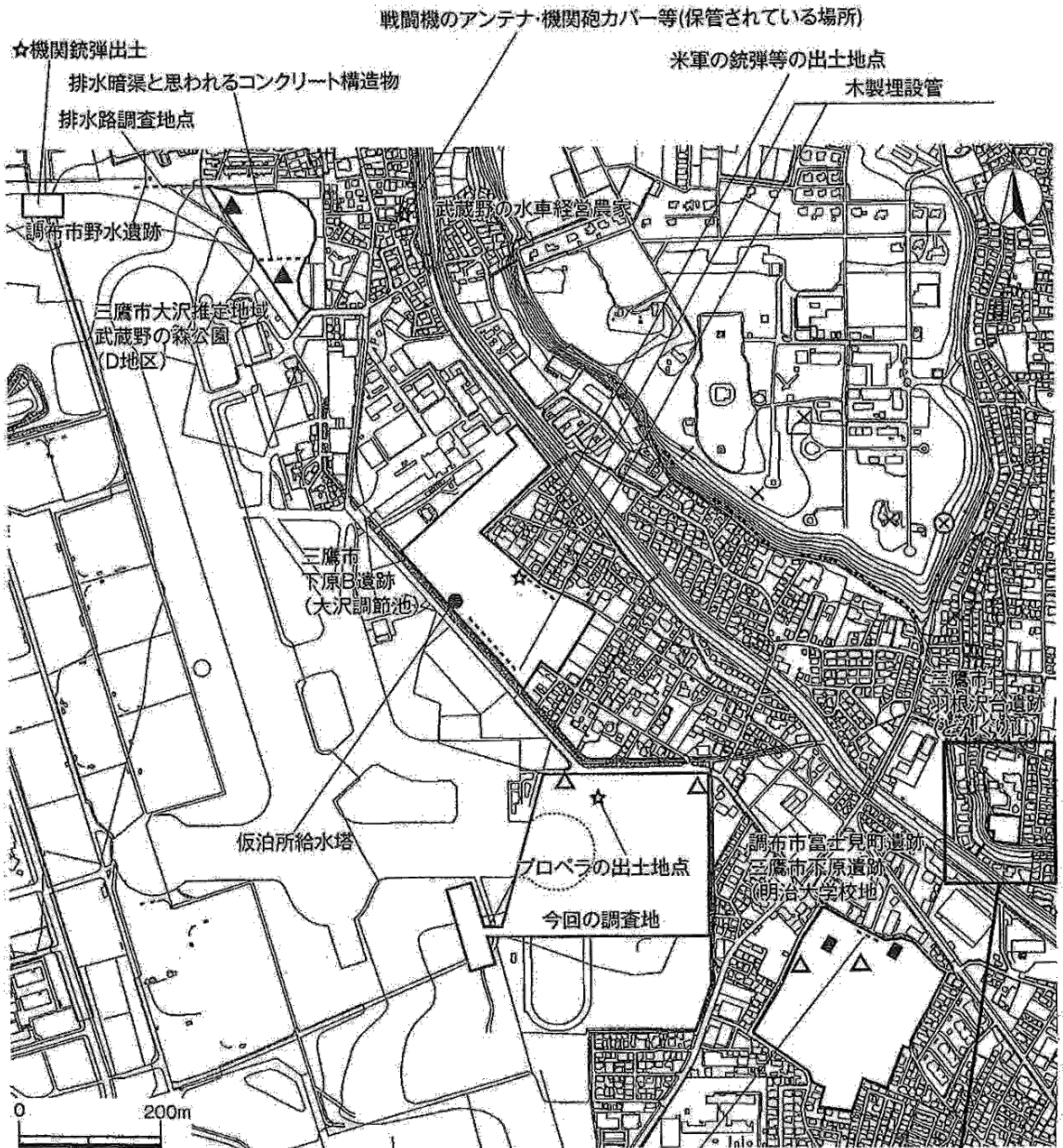
▲射塚（樹木の奥の崖付近）



旧飛行場竣工時入口の門柱(大谷石製・1対)「東京調布飛行場」と書かれている。

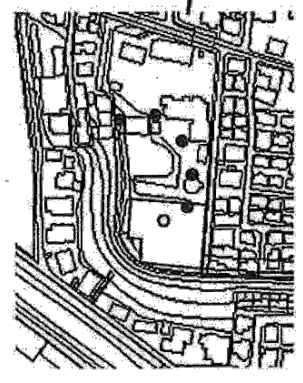
▼高射砲台座(中央)と基礎構造の発掘環状配列6基のうちの1基（次頁右下図）





- △ 調査で検出された掩体壕跡
- ▲ 現地保存されている掩体壕
- 調査で検出された高射砲台座
- 現地保存されている高射砲台座
- ◆ 待避壕跡・塹壕跡
- 水道施設跡・埋設ケーブル跡等
- ・ 軍用防空壕跡
- ☆ 軍事関連資料の発見等地点

- ⊗ 不発弾確認地点(地下で破裂)
- × 爆弾落下推定地点



「調布飛行場周辺の考古学的調査」季刊考古学第116号 金井安子より

④大沢の里水車経営農家 都有形民俗文化財 リーフレット参照

峯岸家は、江戸時代の文化 14(1817)年以來の 5 代にわたる水車経営に携わった農家。敷地内には、母屋、土蔵、製粉小屋、そして水車小屋(覆屋・さや)などのほか、水車用の用水施設、「さぶた」と呼ばれる用水調節装置などがある。平成 10 年には「武蔵野(野川流域)の水車経営農家」として東京都の文化財に指定された。



野川のほとりや対岸にある市指定の「旧箕輪家住宅主屋」とともに、この界限は三鷹市がエコミュージアム構想の最初に力を注いだ地区で、一帯は里山の風景に最も相応しい佇まいを見せている。

●峯岸清旧宅(母屋)

母屋の建築年代は、伝承では文化 10(1813)年頃。三鷹で現存する最古の民家。規模は桁行き 7 間、梁間 3 間の四つ間型。屋根は寄棟造の茅葺。建坪 22.75 坪。平成 6 年に三鷹市に寄贈され、復元修復が行われた。

●水車(新車・しんぐるま)

峯岸家の水車の創設は文化 5(1808)年頃。大正 8(1919)年に大改造された。水輪の直径約 4.6m、幅約 1m の胸掛け式の製粉用大形水車である。精密な歯車や杵の構造、また杵 14 本などの規模や型式ともに武蔵野を代表する営業用水車である。野川の少し上流に「宿

の大車」と呼ばれた水車があったことから、この水車の方がより新しいということから通称「新車(しんぐるま)」と言われたもの。

平成 21 年整備工事を経て、40 年間止まっていた水車が再生され、庭の貯水槽からの水循環により、近年再び回り出した。現地では地下水路や往時の用水路を想像させる「通水橋」の欄干なども見所である。

●湿性花園

三鷹市でも特に緑と水にめぐまれた「大沢の里」エリアにある。昭和 63(1988)年開園。春先～晩秋にかけて、木橋をわたりながら水生植物が楽しめる。カラー・ウバユリ・トクサ・ショウブ等々がある。なお、7 月にはホタル祭りが開催される。

●山葵田(わさびだ)

都内では珍しいワサビ田がある。文政 2(1819)年、箕輪政右エ門が郷里の伊勢から天然わさびを持ちかえり栽培したのが始まり。その後「大沢わさび」の名で神田や築地に出荷されるなど由緒ある田である。



⑤ 出山横穴墓群 8号墓 都指定史跡 リーフレット参照

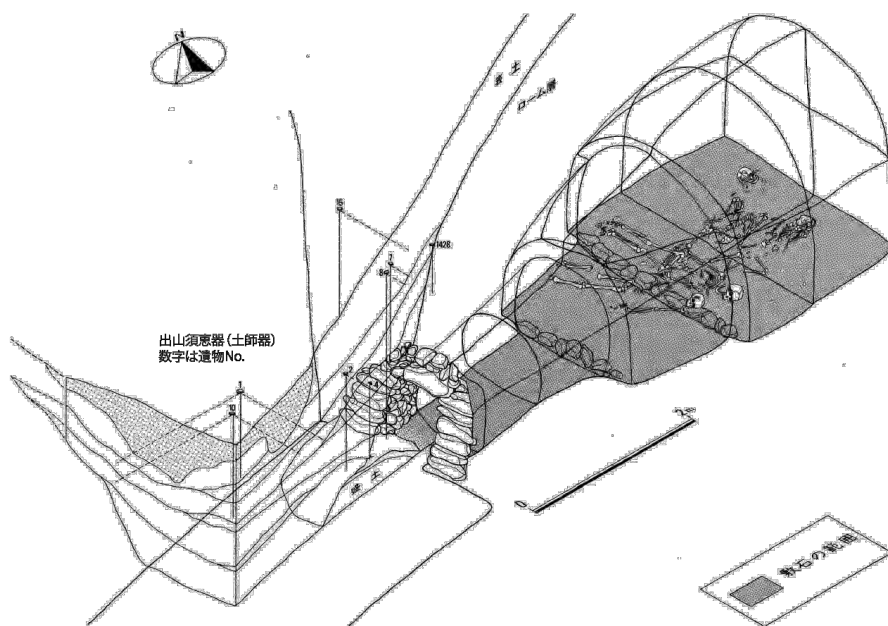


▲ 施設入口部

常時公開の三鷹市域唯一の遺跡見学施設。墓前域から7世紀代の平瓶(ひらべ)・須恵器出土。墓の構築年代もその頃と思われる。羨門(せんもん・墓の入口)に石積みを施し、玄室(げんしつ・遺体を埋葬する主室)は見事なアーチ形天井を有するなど造形美を誇る。室内には4人(40・30代の男性、20代の女性、8歳の小児)が埋葬されている(展示はレプリカ)。



▲ 石積みの墓前



⑥ 土瓶形注口土器(都指定有形文化財) 発掘地

縄文時代後期の竪穴住居跡から発見された極めて大形の注ぎ口を有する土瓶形の土器。土器は三鷹市遺跡調査会展示室で公開中。

● ふるさとセンター

市民農園管理所・出山横穴墓施設管理所 休憩



⑦国立天文台の概要 リーフレットと小冊子参照

明治 11(1878)年に本郷で東京大学見象台として始まり、明治 21(1888)年には東京大学東京天文台として麻布板倉に移され、現在の地への移転は大正 3(1914)年から 13(1924)年に行われた。長い間「東京天文台」の名で親しまれてきたが、昭和 63(1988)年 7 月、文部省所管の「国立天文台」と改められ、さらに国立大学の共同利用機関として位置づけられて現在に至っている。

昭和 24(1949)年以降、観測施設の拡充計画により、長野・埼玉・岡山各県に新たな望遠鏡の多くが開設設置され、三鷹では本部としての管理などの役割のほか、中央標準時や位置天文学関係の観測・研究、大規模な実験や装置の開発的研究等を担っている。

●構内の文化財アラカルト

昭和 20(1945)年の本館焼失によって記録や研究機器などが失われているが、大正・昭和



期に建設された施設や観測等機器は今も健在なものがある。

現在、**第一赤道儀室**をはじめ塔自体が望遠鏡である「太陽塔望遠鏡」通称**アインシュタイン塔**や現在天文観測の歴史展示館の役割を担う**大赤道儀室**の 3 館は国の登録文化財(建築物)である。また、昨年度国の重要文化財に指定された時刻決定を行うための恒星観察用の「**レプソルド子午儀**」なども常時公開されている。なお、新設の展示室や惑星間の距離が体験できる「**太陽系ウォーキング**」、**4Dシアター**(要予約)なども、最近は特に人気をよんでいる。

◀アインシュタイン塔 (国登録)

◀レプソルド子午儀 国の重要文化財指定

子午線上の恒星を観察することに特化した望遠鏡で、明治時代の標準時刻をここで決定していたもの。

●旧 1 号官舎 市登録文化財

敷地北端（裏門付近）の一角には、三鷹市の第 1 号登録文化財である「旧 1 号官舎」がある。移転当初の大正 4 年に建築されたもので、玄関上の唐破風や主人と客人の別空間を備えた高等官の建物。現在「三鷹市星と森と絵本の家」として文化財の再生・利活用のお手本のような施設が公開されている。



●第一赤道儀室 国登録文化財

太陽や恒星、惑星などを自動に追尾する観察用望遠鏡を赤道儀はという。昭和 14(1939)年から平成 11(1999)年までの 60 年間、太陽黒点のスケッチ観測に活躍した。観測装置としての役目は終えたが、見学者向けの観察会が行われる現役でもある。

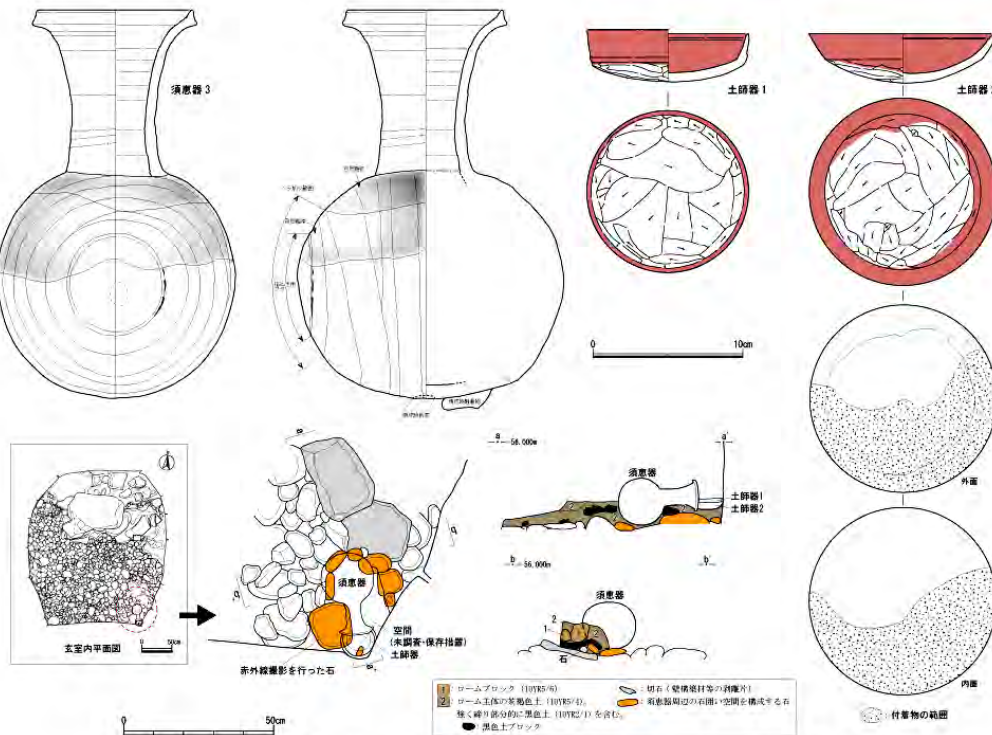
メモ

⑧ 天文台構内古墳 解説小冊子参照

昭和期に一度発掘調査されたが、将来の公開・活用を見据えた再調査が近年三鷹市で実施された。結果、全国でも数例しかない「上円下方墳」と呼ばれる特異な形の古墳であることや、切り石積みによる横穴式の3室構成乃石室であること等から、この付近一帯を支配した有力首長墓であることが判明した。構築時期は出土し須恵器や土師器の年代から7世紀後半（第3四半期）と推定されている。詳細は配布の資料を参照頂くとして、以下には、調査報告書から転載の地図類と出土遺物の実測図を用意した。



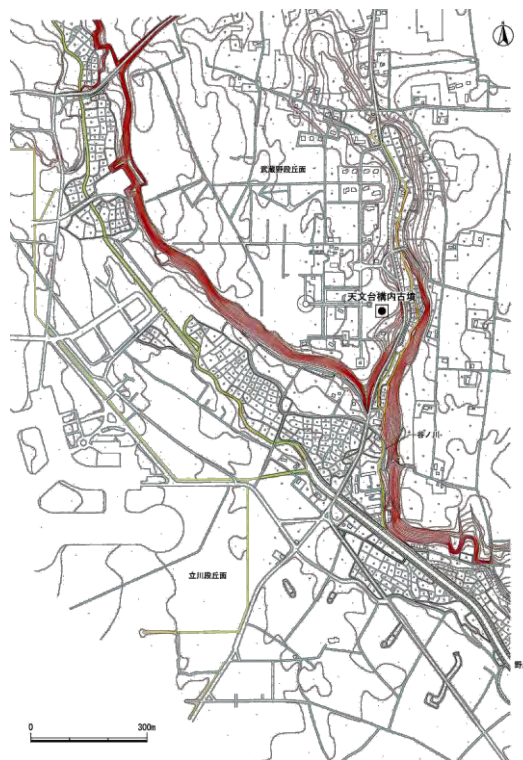
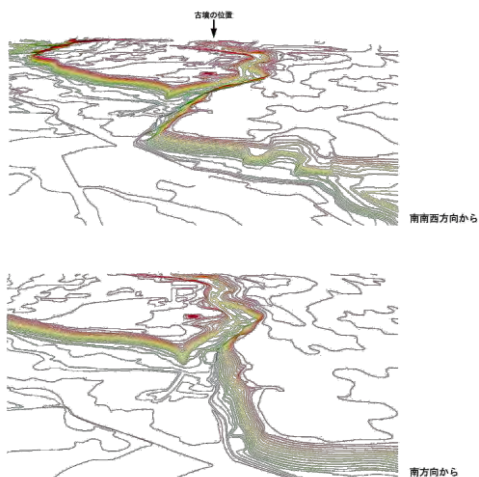
▲ 発掘時の石室・墓前域のようす



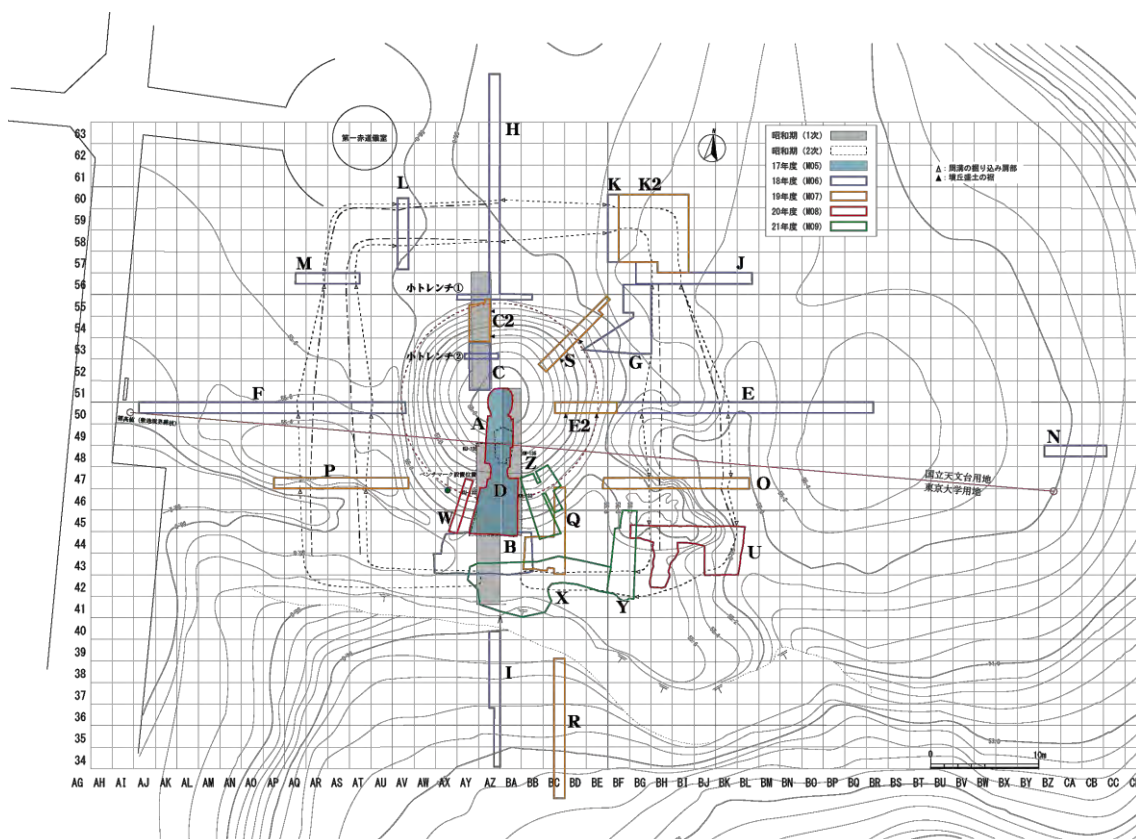
Ⅲ-20 図 玄室内出土の完形土器と出土状態図 <1/10> 実測図 <1/2> 【写真版 13・14・31・32・36】



古墳の位置と周辺地形、及び立面図



古墳の立地解説図
(上図は南東から、下・右図は南から)



注

本資料は主に、『てくてく・みたか (市内歴史散歩)』(三鷹市教育委員会刊)のほか、特記したものを除き、同委員会・三鷹市遺跡調査会発行の遺跡調査報告書、ガイド・リーフレット等を参照しています。掲載写真の大半は高麗によるものです。

